

「もとはこちら」のお話し

№47 今月のテーマ チリ鉱山 奇跡の救出



NHK ラジオこころの時代 収録風景
左側 聞き手 金光チーフデレクター

生き方しだいで
人は畜生にもなれば
菩薩にもなれる

(平井謙次作 日めくりカレンダーより)

北原ゆり筆

南米チリのサンホセ鉱山で落盤事故が発生し、作業員三十三名が地下七〇〇メートルの所に閉じ込められた話は、記憶に新しいところです。

事故発生から十七日経ち絶望視される中、全員が無事で元気であるというメッセージが届けられ、胸を熱くした人も多かったのではないかと思います。

しかし彼らのいる場所は、東京タワーのざっと二倍の深さにあり、気温は三十度を超え、湿度は九〇パーセントという過酷な状態にあり、食べ物も飲み水も無いに等しい状態です。

救出用の管を通すにも長い時間が掛かり、全員を無事に救出できる可能性はともて低いう話に、再び暗澹(あんたん)たる気持ちになった人もまた多かったのではないのでしょうか。

しかしそんな中、チリ政府は諸外国にも応援を求め、これまで培ってきたあらゆる知恵や技術を駆使し、大統領自らが先頭に立って、国を挙げての大救出作戦が始まりました。

その様子は逐一全世界に向かって報道され、事の成り行きを人々は固唾(かたず)を飲んで見守りました。

そして救出用の穴が予定よりも早く貫通し、事故から六十九日経った十月十四日から十五日にかけて、本当に奇跡的に全員を無事に助け出す事ができたのです。

待ちに待ったその救出の瞬間は、待ち構える報道陣たちによって、世界中に中継されました。

そこで私達が見たものは、地上に現れた作業員達とその家族が、強く抱き締め合って喜ぶ姿であり、そしてまた、自分達を救い出してくれた全ての人達に対する感謝と喜びの表情、そしてチリという国家そのものに対する強い誇りを口にする彼らの姿でした。

大惨事を奇跡に変えたもの

思えば、三十三名もの作業員が生き埋めになるというこの大惨事が、七十日後には私達の胸を強く打つ、本当に感動的な話になったのです。



当初、全員救出の可能性は二%しかないと言われておりました。それを一〇〇%の現実のものに成し遂げたこの快挙の要因は、いくつもあると考えられます。

その中でまず真っ先に挙げなければならないのは、何といっても彼ら自身の強い生命力と、そして彼らの運の強さという事です。

しかしただその事だけでは、今回の快挙は決して成し遂げられる事はなかった筈です。こんな最悪の状況の中で、彼らの持っていたその強い生命力を十二分に引き出したものは、彼らの「心の強さ」にあったという事です。

外界との通信も途絶え、自分達が生きている事を知らせるその術もない、食料も水も無いという様な言葉を絶する苦しみの中、それでも彼らは、「必ず助けに来てもらえる。見捨てられる事はない」という確信と希望を持ち、決して絶望をしなかったという事にあります。

私達人間が、他の動物と一番違うのは、精神的な動物であるという事です。

そんな私達の生きる力を弱らせる一番の原因となるものは、実は病気や貧しさなどの直接的な事よりも、それらによって生じる精神的な絶望感、即ち不安や恐怖、そして怒りなどのマイナス感情を持つ事なのです。絶望や強い怒りの心が、自分自身の生命力を弱らせ、最終的に命を落とすような結果となる事が多いのです。

しかしチリ鉱山の作業員達は、その様な最悪と言わざるをえない状況の中にあっても決して絶望しなかったという事が、何よりも大きな原因だと考えられます。絶望する代わりに、自分を待っている家族の事を思い、生きて地上に戻る事を強く強く念じ続けたというその想いが、彼らを生かしたのです。

そして次は、一人ひとりが個々別々に生きるのではなく、全員が一つになったという事です。一日二回、一つになって祈る事によって、自分達は一

人で生きているのではないという強い連帯感を持つことが出来たのです。そして三番目に挙げられる事は、そんな絶望的な状況の中にあっても、彼らは普段に近い生活をしたという事です。仕事をするグループ、くつろぐグループ、そして寝るグループと三つのグループを作り、ローテーションを組んで地上にいる時と同じ様な規則正しい生活が続ける事で、心も体も生体リズムを狂わす事なく、健康を維持する事ができたのです。

また、ただ受身になって漠然と救済を待つだけでなく、積極的に仕事を

したという事も、自分達の気持ちを前向きにする為に、とても大切な事でした。

勿論こういう不測の中であって慌てる事なく、全ての人が助かる事を念頭に、冷静沈着に動いてくれた優れたリーダーがいたという事も、そしてまた一人ひとりが消極的にその指示に従うだけでなく、自分は自分のリーダーであるという事を認識しながら協力し合ったという事も忘れてならない大切な事です。

そして彼らを救出する為に、寝食を忘れ、二十四時間体制で懸命になって働いた多くの人々の力、祈り続けたチリの全国民の想い、そして陰ながら彼らの事を見守り続けた世界中の人々の大きな祈りの力などが重なり合って、今回の奇跡が生み出されたのだと思います。

今回のチリ落盤事故救出の話は、歴史上に残る話として映画化され、或いは本になる等して、あの沈没した豪華客船タイタニック号の話のように、長く人々に語り継がれる事だろうと思います。しかし彼らは、自分達の事を英雄視するのではなく、常に誇りある鉱山作業員として見てほしいと言っているようです。

地獄と極楽は、紙ひとえ

さてこれら一連の話の中で、とりわけ心引かれる感動的な話がありました。

それは、ようやく穴が貫通し、いよいよこれから救出が始まるというその時に、三十三人全員が、「一番最後に救出するのは、どうぞこの私にしてほしい」と申し出たという話でした。肺炎を起こし体の具合の悪い人、皮膚病でいたたまれない状態にある人達までもが、自分を最後にして、他の人を先に助け出してあげてほしいと申し出たというのです。

思えば地下七〇〇メートルという光の届かない、文字通り地獄のような場所にいながら、彼らは間違いなくその場で心の天国を築き上げていたのです。

昔子供の頃、次の様な話を聞いたことがあります。

ある人が地獄を訪問する事になりました。

案内された所は真っ暗で、何も見えません。しばらくして暗闇に慣れてきた目に映ってきたものは、やせ細った人達の姿でした。



目だけを異様にぎらぎらと血走らせた彼女らは、よく見ると、手に細くて長い鉄のお箸を持ち、今にも何かに飛び掛ろうとして身構えている様です。

彼らの前にはテーブルがあり、その上には食べ物が盛られています。彼らはすきを窺ってそれを食べようとするのですが、お箸が長すぎてうまく口に運ぶ事が出来ません。死ぬほどおなか为空いているのに、そして目の前に食べ物があるのに、それを食べられない彼らはイライラして腹を立て、そしてその食べ物誰かに取られるのではないかと必死で見張っているのです。しかしその食べ物も、誰にも食べられない為に腐ってしまい、今はうじ虫が湧き、悪臭を放っています。

それでもその食べ物を巡って夜になっても寝るものはおらず、また食べ物の前から離れられない為に、風呂にも入らない彼ら自身からも悪臭が立ち上り、暗闇と悪臭の中、辺りには陰湿な雰囲気立ち込めています。

訪問者は深いため息をつきながら、地獄を後にしました。



次に訪問者が訪れたのは、天国でした。

そこにも沢山の人がいました。全員おだやかで健康そうで、あちこちから楽しそうな話し声や笑い声が聞こえてきます。

ふと見ると、そこには地獄で見たのと全く同じテーブルがあり、上にはこれまた全く同じご馳走が盛られています。テーブルの端には、地獄で見たのとこれまた同じ細くて長い鉄のお箸が揃えて置かれています。

しばらくして合図の鐘が鳴り、人々はテーブルの周りに集まってきました。そして夫々がその長いお箸を手に取りました。訪問者が見ていると、彼らはお箸を上手に操り、挟んだご馳走を自分の口に運ぶのではなく、それを向かい合った人の口の方に運んでいくのです。向かいの人はおいしそうにそれを食べ、今度は自分がしてもらったのと同じ様に、その長い鉄箸を上手に操って、向かい側の人に食べさせます。

途中で失敗してこぼれてしまう事もあるのですが、そんな時も決して相手を責めたり怒ったりせず、お互いに笑いながらも一度やり直しているのです。

そういう風にしながら楽しく食事をし、食事がすめばまた夫々が元の自分の持ち場に戻っていきます。食事の後片付けをする人、掃除をする人、新しい仕事の計画を練る人などで、そこにいる誰もが自分のする事を楽しんでるようです。

相手を生かす者こそが、生かされる

天国と地獄。そこにあるのは、同じテーブル、同じお皿、そして同じ長いお箸とご馳走でした。

しかしそこにいる人達は、全く違っておりました。

片方は、耐えられないような空腹と、不信感と憎しみに満ちていました。皆が自分の事しか考えず、悪臭を放ちながら暗黒の中で、睨み合い争い合っているのです。

片やもう一方は、しっかりとご馳走を食べ、仕事を楽しみ、そして互いを思い合う慈しみの心で仲良く楽しく暮らしていたのです。

こちらの人々は、自分の事だけでなく常に相手の事を考え、自分が空腹ならば、相手も空腹に違いないと思い、自分が食べるよりも先に、相手に食べ物を与えようとする人達でした。いわば人の喜びを我が喜びとし、それを実行する人達です。そうすれば、見返りなどは求めて求めなくても「自分がした通りの事を、人からもされる」という平井先生の教え通り、した事の結果として、今度は相手から自分が食べ物を頂ける事になるのです。

食べ物を運んでくれた人は、自分にとっては命の恩人です。そしてまた、運んでくれた人だけでなく、食べ物を作ってくれた人も、食べ物となって自分に命を捧げてくれた動物や植物達も、自分にとっては命の恩人であることが分かります。全てのもの、全ての人に感謝しながら、生き生きにここに生きる明るい世界が開けてくるのです。

しかし地獄の人達はそうは考えません。自分がこんなに空腹であるのだから、他の人も空腹に違いない。だから自分がそうである様に、彼らもあの食べ物を狙っているに違いない。奴等に食べさせてたまるか、あれは自分が食べるのだ、と考えるのです。

相手を通して自分の醜い姿を見ているのですが、その事に気がつかず、一寸一刻も油断は出来ないいつもイライラし、空腹感にさいなまれない敵に取り囲まれ、苦しんでいるのです。そして神も仏もないとわめいている、まさに地獄の住人になっているのです。

さて、もしも今回の作業員達が本当の地獄の住人であったならば、地下に閉じ込められたその時点で絶望し、残り少ない食料を奪い合い、自分以外を皆敵とみなして争い合い、そしてこのような危険な鉱山に自分達を送



り込んだ国や当局の安全管理の体制に問題があったのではないかという怒りや嘆き、そして不安や恐怖の念で、真っ先に自分達の健康を害していた筈です。

そうなれば現実問題として、いくら地上から救出の手立てを立て、どのような手段を講じたとしても、今回のような全員無事救出という様な、素晴らしい奇跡など起きる事も無く、無残な結末を迎えていたのではないかと思います。

しかし実は今回のチリでも、地獄となりかけた事があったそうです。

小さな穴が貫通し、不足していた食料や物資が次々と作業員達に届けられる様になった時、欲の心が起きてきて、奪い合いや争い事が起き始め、結束力が損なわれるような事になってきたのです。しかし彼らは共に祈るという行為をする事で、その危機を乗り越える事ができ、強い結束力を取り戻すことが出来たのです。

そして最終的に彼らは、全く光の射さない地下七〇〇メートルという暗黒の場所を、自分達の心の光で天国に変え、三十三名の作業員たち全員が救われる事になったのです。

生死の境に置かれ、救出までの六十九日間という気の遠くなるような長い苦難の時間が、作業員達の魂を浄化し清め、自他一如の心となり、全ての人が一つになる事の大切さをしっかりと学んだのだと思います。

いま、誰もが天国の住人となる道を

さて、彼らが地獄のような環境の中で、命がけで憧れ続けたのが、地上の生活です。家族に会える事、普通に寝起きし、顔を洗い歯を磨き、贅沢ではなくても家族一緒に食事をし、汚れていない水を飲み、お日様に当てること。

それらの全てが、彼らにとっては最大最高の憧れの生活であったのです。その事を祈り続け、そしてそれらを手にした瞬間、彼らは歓喜に打ち震えたのです。

その憧れの地上生活を、いま殆どの人が、全くあたりまえの事として、大した感慨もなく過ごしているのではないのでしょうか。

格別に感謝する事もなく、時には不足不満を言い、努力の割りに報われる事が少ない、などと想ったりしているのです。

しかし実は今の私達のこの人生は、無意識の自分、生き通しの自分が



憧れ続け、求め続けた末に、ようやく手にした生活なのです。そしてそれは、自分でも忘れ去った過去の生き様に丁度見合った結果の生活であり、最高の人生であるのです。

落盤事故にあった作業員たちが、七十日近い地下の中で本当に多くの素晴らしい事を学んだ様に、私達も今の生活の中から、必ず多くの事を学べる筈であり、その為に最適な今の人生があるのです。

天国と地獄の違いは、ものの考え方の違いにあります。作業員達も他人の立場を忘れ、自分ひとりの欲望を優先させようとした途端に、そこは地獄になりました。

ところが相手の事を思いやり、一つとなる事を学んだ途端に、その地獄は極楽に転じ、結果として全員が救われる事になったのです。

人生を地獄とするも天国とするも、全ては自分次第です。

周囲を敵と見るような考え方を捨て、他を生かし、皆が一つとなつて共に生きていく世界を目指す事で、全ての人が救われる天国が生まれるのだという事を、私達は今回の事故の中からしっかりと学び取りたいと思います。

私達は元々神の子であり、天国の住人です。

人間は決して一人で生きているのではなく、常に神と共に、そして全ての人と共に、いつも一つの命として生きているのです。

〔ご案内〕

十一月の勉強会は、十一月二〇日(土) 午後七時からです。
次回十二月は、十二月十八日(土) 午後七時からの予定です。
皆様のご参加を、お待ちしております。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com